

新薬師寺総合調査

美術工芸研究室・歴史研究室・建造物研究室

新薬師寺は天平19年(747)に聖武天皇の病氣平癒を祈って光明皇后が建立されたといひ(東大寺要録)、一説に天平17年(統日本紀)とも伝えられている。本寺の本尊木造薬師如来坐像、本堂については制作年代等についての定説がなく、本格的調査も行われていなかった。こうしたことから本尊については1975年12月、文化庁美術工芸課、奈良国立博物館および当研究所美術工芸研究室の手で調査が行われた。その際本尊像の像内から発見された納入経は歴史研究室が調査を担当することとなり、これと並行して本尊像と密接な関連が予想される本堂の調査も建造物研究室によって行われた。今回の調査は各部門とも今迄になく詳細かつ本格的なものであって、その結果は不明の点の多かった新薬師寺の歴史、文化財について解明するところも少なくないと考えられる。なお、建造物研究室では本堂とともに地藏堂等の調査も行っており、あわせて報告する(口絵2, 3)。

1 木造薬師如来坐像

今回の調査は修理調査が主目的であり、2 mに近い巨像を台座から下す大がかりなものとなった。坐像の構造や技法については、1975年6月に奈良国立博物館と協同で行った予備調査の結果がほぼ裏付けされた。

像は螺髪を植付け、耳環環状、三道を彫出し、身には大衣を偏袒右肩にまとい、各屈臂して左手を膝上に置き、手首をわずかに内側に向け、掌を仰いで第2・3・4指を軽くまげて薬壺をとり、右手は前方に出し手首をやや外に傾け第3指をわずかにまげて掌を開いて立て、左足を外に結跏趺坐する。材質は榧材、頭体根幹部は両手上膊内側部、脚部正面の一部までを含めて一材から彫成、後頭部と背面に分けてそれぞれ内刳を施し、像のほぼ中央に籠められた木芯の部分を取り、後頭部は植付けた螺髪の下に横長の蓋板を、体部は襟下から地付に至る長方形の背板を当てている。なお頭頂の部分と頭体の内刳の境の部分(頭部)、即ち木芯が取除けられなかった部分は後世に何らかの衝撃をうけたためか欠失し、現状では、内刳が地付から頭頂まで貫通し、頭頂には銅板(後補)を当てて蓋をしている。この根幹材に左袖外側部、右上膊外側部に各別材を刳付け、左手首、右手肘付近をさらに刳付けている。両脚部は10数材の縦木を上体の木目に合わせるように揃えて体部材を組入れるように刳付けている。裳先は後補。

光背は二重門相光。頭光を中心に蓮花八葉(十一方二遍切付)、その外に放射光をあらわし、二重の紐でくくった連珠文帯の覆輪をめぐらし、外圈は四花と宝相華蔓文を配し、外縁に覆輪(内圈分に花卉繫を加えたもの)をめぐらす。身光は内圈無文、外圈は光脚先端から伸びた宝相華蔓草と荷葉を配し、頭光と同様にそれぞれ覆輪をめぐらす。頭・身光共外圈左右に化仏を付す(頭光分2軀—後補、身光分4軀)。化仏はそれぞれ本尊像と同形で、光背は二重門相光(周縁部欠失)、台座は荷葉座で、下方から伸びた宝相華の茎上にある。周縁部は宝相華葉及び火焰をめぐ

らし、頂上に火焰付の宝珠を付す。

光脚は五頭形荷葉、下辺に蓮弁を並べた受座を付す。以上光背は松材製、漆箔（後補）。二重円相、周縁部光脚など主要部は縦3材矧で、化仏の光背もこれらの材から彫出している。これに頂上の宝珠、火焰、化仏を受ける宝相華等を矧足し、以上を光脚の受座に嵌込み、台座上に固定し、台座上框から立てる八角の支柱で支えている。化

第1図 薬師如来像、像底の矧合図

仏はいずれも松材・漆箔、右中段像のみ背剝を行っているが他は荷葉座までを含み丸彫とし、膝頭や荷葉の一部などを矧足している。各像は背面に打たれた鉄又は銅の環3個で光背に付すL字型金具にかける。

台座は宣字形裳懸座。上框正面及び左右前半に裳を垂らし、受花（複弁）、腰部は四隅に柱を立て、その間に鏡板を当て、柱を挟んで飾板を当て鏡板を格狭間形に残す。反花（複弁）下框（方形）2段からなる。いずれも松材製で、上框は四方矧寄、中央部は5枚の横材を張る。受花、反花、下框第1段、同第2段はいずれも四方矧寄、腰部は柱、格狭間形飾板各一材製、この内側に4本の補強柱と各2枚の化粧束を立て、その間に横材の鏡板（前後及び右側分各1材、左側分2材）を当てる。垂裳は前面縦4材矧、両側分2材矧（前方縦材、後方横材）、なお台座内部に松材の補強架構（後補）がある。垂裳は漆箔（後補）、腰部の柱、化粧束を古色とする他、素地のままとする。

今回の調査で特に注目されたのは本体の木寄である。この像は従来からはほぼ全容を松の一材から彫出したものといわれていたが、予備調査の際に、框材であること、両脚部に不整の矧材のあること、内剝が施され背板を当てていること、両手が矧付けであることなどが確認され、その後、像を移動した結果、前述のような詳細が判明した。一木といわれていたのは、両脚部や右腕の矧材にいずれも縦材を使用し、あたかも一材から彫出したように木目を意識的に揃えて矧合せていたためである。この像の場合、このような構造から推定すると、元来全容を一木から彫出するのが目的であったが、像高191.5cm、膝張154.0cmに及ぶ像を彫出する原材が得られなかったため両脚部等を矧足したものと考えられる。飛鳥時代の木彫像が構造や技法の面から金銅像をそのまま木彫に移した感があるのに対し、本像の場合は木彫としての意識を十分に認めることができる。しかも像のほぼ中心部を通る木芯を取除いて内剝を施すのは、木材の保存上の性質を作者が理解していたためであろう。

次に様式的な特色である。幅と奥行を十分にとった頭・体部に眼鼻立ちをはっきりと刻んで、

測 点	法 量
本体像高	191.5cm
髮際—頸	38.3
面 幅	39.2
耳 張	51.7
面 奥	51.3
肘 張	152.2
胸 厚	61.5
腹 厚	75.0
膝 張	154.0
膝 奥	126.1
膝 高 各	31.2
光背総高	319.5
最大 張	262.5
化仏全高	43.4~49.0
台座総高	104.5

第1表
薬師如来像法量

特にまぶたの輪郭や衣の縁などは鋭角に喰込むように刻んでいる。頬や胸などは肉を十分残しきびれもはっきりと深くあらわし、見事な刀の冴えが感じられる。こうした特色は唐招提寺に伝わる木彫群(天平時代後半)との関連も想起されるが、むしろ中国唐時代の檀像彫刻が様式上からも技法面からも基となっているのではないかと想像される。なお光背の意匠は独特のものであるが、強いて類例を求めると京都勝持寺薬師如来坐像(像高9.1cm)があげられる。この像は松材の丸彫(光背、台座も共彫)で、いわゆる檀像彫刻と呼ばれており、本体の表現にも共通点が認められる。

新薬師寺の本尊像は様式的に本寺が再興された延暦12年(793)頃の制作と考えられているが確たる証拠はなく、むしろ今回の調査で判明した構成や技法、或は本堂との因果関係などから今後の研究によってその位置づけがなされるであろう。

なお、後述の納入品は像内内刳部、像底から約30cm高の位置に前後に渡された2本の棧(後補)の上に置かれた杉箱に納められていたもので、このうち法華経8巻は本像と相前後する頃のものとして認められるが、像内の内刳の状態や納入状況から、当初の納入品であるか、追納入であるかは断定し難い。

(田中義恭)

2 薬師如来像内納入品

像内より発見された納入品は法華経(8巻)、手錫杖(1柄)、法螺貝(1口)、納入品奉籠箱(1台、今回取出されたのは蓋のみ)、明治年間納入願文等である。ここでは紙数の都合上、法華経ならびに納入品奉籠箱蓋についてのみ述べることにする。

法華経 8巻 卷子本、料紙黄殻紙、墨界線、原表紙(褐麻紙)、原軸(黒漆朱頂棒軸)、1行17字、白点(仮名、ヲト点)、縦27.5cm

本文・外題ともに全8巻すべて同筆で、1人の手により書写されたものである。その書法を見ると、奈良時代後期の写経に通ずるものが認められる一方で、それが崩れ筆者自身の筆癖が顕著に現れた個所が各所に入り交っている。これは写経に際して利用した藍本の書法に強く影響されながらも、時に個性が表に出て来たことによるものであろう。筆者の個性が現れた個所の書法には平安時代初期のものに一脈相通するところも認められる。したがって、奥書はなく正確な書写年代は不明であるが、本経の書写は奈良時代末期乃至平安時代極初期(8世紀末乃至9世紀初頭)頃と推定しうる。なお書法の統一性に欠けることにより、この筆者は写経生のように写経に慣れた人ではなく、したがって写経所で書写された経ではないであろう。

8巻全体にわたって白点(仮名・ヲト点)が付せられており、またその白点の上に重ねて朱句点が打たれている。白点・朱点の剥落状況より、白点が先で朱句点は後と見られる。朱句点の打ち方は疎であり、文章の大きな段落を示すために付けられたものである。このヲト点には

現在知られているヲコト点の系統とは大きく異なっており、特殊点と呼ばれているものの部類に属する。また星点（・）が主で、それ以外の線点（|、一）の種類は極めて少く、また星点の形も乱雑で細長く、線点との区別が紛らわしい形のものも少くない。これらの現象はヲコト点発達史上極初期のものに多く見られるところである。また仮名字体は万葉仮名本位で、漢字の画の一部を省略して作られた省画体仮名が少い。さらにその字形は大形で、後世の漢文の振仮名・送仮名のような小字ではなく、本文の漢字に匹敵する程の大字のものも数多く見られることが注目される。

現在、加点点年代を明らかにしうる最古の調点資料は『成実論』天長5年(828)点(聖語藏・東大寺)である。

第2図 法華経部分

この天長5年点は西基点・仁都波迦

点系の第一群点に属し、星点の他に線点多種類用いられ、ヲコト点としてはかなり整備されたものとなっている。またその仮名字体も万葉仮名は少く、省画体仮名本位となっており、その字形も小さくなっている。

このように、この法華経と成実論の白点を比較してみると大きな相違点があり、この法華経古点は『成実論』天長5年点よりも古体を示している。したがって法華経古点の加点点年代は天長5年よりも溯ることが推測される。しかし現在では天長5年以前の加点点年代を明示する資料としては、延暦年間句切点・返点を加点点したことが知られるものがあるのみで、ヲコト点・仮名については明確に年代を示すものは存在しない。したがって国語学上はこの法華経古点は弘仁年間を降らない平安時代極初期頃の加点点ということができると過ぎない。しかしその時期は書風による書写の時期と大きく隔たるものではなく、加点点は書写後間もない頃と考えられよう。

朱句点の加点点年代は未詳であるが、その朱はやや褐色を帯びていることにより、平安時代初期乃至はそれに近い頃といえる。その打ち方より、文章の大きな段落を示すために白点の補助として用いられたと考えられ、白点とほぼ同時であったとして差支えなからう。

後述の奉籠箱蓋銘によれば、本経は元禄11年(1698)7月、本尊修理の際に細字法華經・金剛般若經・薬師本願經とともに像内より発見されたもので、本法華經のみが再度像内に納められたため今に存することができた。この法華經の納入時期については本尊造立当時またはそれより後の或時期の二つの考え方が成り立つ。しかし本経発見時には表紙は埃による若干の汚れはあったが、手擦れによる汚れは認められなかった。これは書写加點より納入までの期間があまり長くなかったことを示すものである。また像内納入経の現存例を見る限りでは、願主もしくは関係者が自身で書写するかまたは新刷せしめた写経・版経、もしくはとくに関係の深い本、或は二親・先師と因縁の濃い本を納入するのが通例である。したがって本法華經も、かなり後代になってからたまたま手元にある経を奉納したとするよりは、薬師如来像造立直後に納入されたと考える方が妥当なのではなからうか。本像造立が一般に推定されているように延暦12年(793)頃とするならば、本経の書写ならびに加點はそれをやや遡る頃と推定される。

奈良〜平安時代初期頃書写の法華經は数多く現存しているが、当初のままの姿で1部8巻具備して伝存している例は極めて稀で、その点でも注目すべきものである。またもしその納入時期が造立当初とすれば、本経白点の加點年代もかなり限定され、国語史資料としても極めて貴重なものとなる。また像内への仏舍利・經典・願文納入の現存例としては最古のものとして大きな問題を投げかける。なお白点については築島裕・小林芳規氏の御教示によった。ここに記してあつく御礼申し上げる。

納入品奉籠箱蓋 1口 杉材、覆蓋造、縦38.5cm、横22.4cm、高さ4.5cm

蓋内面には右掲のような墨書銘が記されている。材色より見て元禄12年に新材をもって作ったものではなく、古材を利用したものと見られる。この銘文と、元禄13年7月にかの有名な護持院隆光によって作られた『新薬師寺縁起』とによって元禄年間の修理の状況を知ることができる。

(田中 稔)

(蓋裏墨書銘)
 于時元禄十一^{壬午}年秋七月從將軍綱吉公母堂桂昌院殿
 蒙本尊修覆之仰取去臺座本尊御腹内奉納御經覺
 法華經細字全部一卷金剛般若經一卷薬師本願經一卷
 右三通爲後驗令感得祿宝藏又法華經全部八卷如右奉
 納畢是經御腹内有之經也其外薬師經理題經并
 如意宝一形内佛舍利三粒法ヲ奉納畢
 于時元禄十二^{乙未}年四月佛生日
 佛子舜清白敬

第3図 奉籠箱蓋墨書

3 本 堂 付地藏堂

現在の新薬師寺は春日山麓の西と南に開けた低い丘陵の末端上に立地する。天平勝宝 8 歳(756)の「東大寺山界四至図」には東大寺法華堂の真南に当たるところに「新薬師寺堂」が描かれている。これが七仏薬師像を本尊としてまつた創建当初の金堂とすれば、現寺地よりも西方にあり、現在の本薬師町あたりに推定される。

現在の本堂の建立年代は様式上、天平時代の建立と認められているが、その由緒は明らかでない。応和 2 年(962)の大風で金堂が倒れるまでは、本堂と金堂は共存していたようである。応和の災害以後、金堂を再建したかどうかは明らかでないが、平安時代末頃には現本堂が寺院の中心となっていたと考えられる。現在の寺地が当初から寺域に含まれていたとすれば、その東北隅にあたる位置にあり、創建伽藍とは別個の別院的な存在であったと思われる。

現在、境内には本堂(国宝)を中心として、その前方東に鐘楼(重文)、西に地藏堂(重文)があり、本堂の正面に南門(重文)、東に東門(重文)を開く。これらの建物の建設年代は、本堂は天平時代末期、東門は鎌倉時代初頭を降らず、鐘楼は鎌倉時代初期、南門は鎌倉時代末期と推定され、地藏堂は棟木墨書銘により文永 3 年(1266)と確定した。このように、鎌倉時代を通して現在の寺地は整備されたようであるが、『奈良坊目拙解』(享保20年・1735)、『大和名所図会』(寛政 3 年・1791)、寺蔵古図(明治 2 年)によると江戸時代にはこれらの建物のほか釈迦堂、大日堂などの小堂があった。現在の地藏堂はもと鐘楼の西に近接して建っていた西正面の建物で、現在の地藏堂あたりに今は釈迦堂、南門外の東脇に大日堂(明治 2 年古図には地藏堂と記す)があり、明治前半期に釈迦堂、大日堂を廃して地藏堂を現在地に移していることが判明した。

以下は調査した各建物のうち、本堂と特に新しい知見を得た地藏堂についてのべる。

本堂 入母屋造、本瓦葺で、基壇上に建ち、内部は土間、天井は化粧屋根裏である。内陣中央の円形須弥壇に本尊木造薬師如来坐像と、その廻りに十二神将立像をまつている。

建立後の経過については古材を分類すると、平安時代中頃に柱の取替えに及ぶ修理があり、更に平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて、軸部、組物、構架等の全般にわたる大修理が認められる。鎌倉時代初期頃には内陣に天井を張っている。『新薬師寺縁起』によると延慶 3 年(1310)には正面に礼堂を設けている(天井と礼堂はともに明治修理に際して撤去された)。また、繫虹梁や肘木等に松材を用いた中世材があり、後世の大修理も再三にわたって行われている。元禄 12 年(1699)の本尊木造薬師如来坐像の修理に際して、本堂にも修理を加えたと思われるが明らかでない。内陣正面の柱絵はこの頃のものと考えられる。柱に残る痕跡や古図等によると、側面や背面の庇の随所に間仕切や中二階を設けており、参籠等にあてられていた。

明治30年 6 月古社寺保存法が制定されると、同年12月に特別保護建造物に指定され、この間に解体修理が行われて、建立当初の姿に復原された。

平面規模は母屋が桁行 5 間、梁間 3 間であり、周囲に庇をめぐらす。柱間寸法は桁行中の間 4.772m(天平尺16尺)で特に広く、その他は桁行、梁間ともに2.983m(天平尺10尺)である。

第4図 修 理 前 の 本 堂

第6図 本 堂 断 面 図

基壇は花崗岩壇上積で、正面3間、両側面中央1間に石階を設けている。この基壇は延慶3年に礼堂を取付けた際のものと考えられ、明治修理に際して礼堂を撤去したために正面基壇を縮めて整備されている。

柱は丸柱で、柱頭に丸味を付け、柱径は上下の差がなく膨らみはない。柱頭には頭貫を通し、側柱、入側柱とも大斗肘木を置き、柱間に間斗束を立てて断面円形の桁を受ける。側柱の大斗肘木には繫虹梁をかみ合わせて入側柱とつなぎ、内部は中央に4通りの大虹梁を架けている。肘木と虹梁は相欠きに組合わせて大斗に切込んで納める。

妻飾りは冢叉首、内部大虹梁の上は合掌を組み、入側桁と棟木の間に母屋桁を通している。

第5図 現 在 の 本 堂

妻の冢叉首は側面の入側桁に直接叉首束と叉首棹を立てる。軒は二軒繁垂木で、1支1尺に割付けている。地垂木には断面円形の当初材を残すが、飛檐の角垂木はすべて中世以降の後補材である。

屋瓦は螭羽瓦に興福寺の鎌倉再建食堂と同形式の軒先瓦が多く残り、また大棟の西鬼瓦と降棟の2つの鬼瓦は興福寺北門堂(承元4年・1210)と同形式とみとめられる。

第7図 本 堂 平 面 図

柱間装置は正面中央3間、背面中の間、両側面中の間を扉口とし、他は土壁とする。扉口には内法長押を打ち、地覆、方立、楣、辺付、唐居敷を組み、小脇壁は土壁とし、板扉を内開きに吊込む、辺付に大きく唐戸面を取るの珍しい。東側の扉板は当初のもので、珍しい工法のものである。

この本堂の各部の形式、手法をみると、造営尺や虹梁の形式、桁や垂木の断面が円形で、柱天の丸味の大きいこと等は天平時代の手法をよく表わしている。しかし、肘木と大斗の納まりや、扉口辺付の唐戸面等に新しい手法が用いられ、地垂木勾配もやや緩くなり、これらの特色

を総合すると天平時代の末を中心とする頃に、その建立年代を推定することができよう。また正面中央間を特に広く取り、母屋の梁間を3間としていることは、仏像の安置と密接な関係が考えられ、当初から仏堂であったことは疑いなく、簡素な古代仏堂の好例と云えよう。今回の調査によってこの堂の性格と沿革を一層明らかにすることが出来た。

地藏堂 桁行1間、梁間1間、入母屋造、本瓦葺、妻入の小堂である。建立年代は、慶長15年(1610)修理時の棟木の墨書銘に文永3年(1266)とあって、様式上も同年の建築と認められる。

軸部は円柱、側背面三方に腰長押、四方内外に内法長押を打ち、柱上頭貫に大仏様木鼻を付ける。四方に後補の飛貫を通し、側面は塗込める。正面は連子欄間下を格子戸引違いとし、他の三方は土壁とする。組物は平三斗組、中備えは正側面が本葺段で、背面は間斗束である。軒は二軒で地垂木を繁垂木とし、飛檐垂木は地垂木1本あきの疎垂木で、中央のみ吹寄せとする。屋根は入母屋造の本瓦葺で、妻飾は冢叉首である。

軸部、軒、小屋、妻飾りともに当初部材をよく残すが、後世の改変も著しい。

正面の連子欄間は当初の扉構えの楣と三方幣軸を利用したもので、上幣軸には扉の軸釣金具当りがあり、縦幣軸の外側に沿って大面取の方立柱仕口がある。また両側面でも内法長押下面に正面とほぼ同寸の幣軸痕跡があり、三方が扉であったことが分る。また、柱には四方に半長押痕跡と縁をめぐらせた跡があり、堂内は床張りであったことがわかる。

軒は当初の隅木によると、飛檐も繁垂木で、現状の軒の出は地垂木、飛檐垂木ともに一丈ずつ切り縮められている。

小屋構造は隅木に四天束を立てて叉首台を受け、叉首台両端に母屋桁を架け渡し、棟木は冢叉首上の斗で受けている。化粧隅木尻は現在側桁上に架けた井桁状の梁で支えられているが、もとは中央で4本組合わせて栓で止めていた仕口が残る。棟木は慶長修理の取替え材で、棟束、栂木も後補である。

建立後のかなり早い時期に背面に鴨居を入れて引分戸とし、軒の出を縮小して両側面の扉口を壁に改めたと思われる。更にのち、四方に飛貫を入れ、床、縁を撤去し、正面の幣軸を切って鴨居を入れ、上に盲連子を嵌め入っている。この時期も明らかでないが、慶長修理の頃と思われる。方1間の小堂であるが、当初から本瓦葺であったようで、三方を扉口とする独特の形式であり、建立年代及び後世の修理の状況も明らかになった。鎌倉時代中期の特異な遺構と認められ、細部、手法もすぐれている。

第6図 地藏堂復原立面図

(岡田英男・宮本長二郎)